



TITLE:

<研究論文>国際バカロレアのDP科目「哲学」に関する一考察 --
TOKとの相違に着目して--

AUTHOR(S):

次橋, 秀樹

CITATION:

次橋, 秀樹. <研究論文>国際バカロレアのDP科目「哲学」に関する一考察 --TOKとの相違に着目して--. 教育方法の探究 2019, 22: 45-52

ISSUE DATE:

2019-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/241661>

RIGHT:

許諾条件により本文は2020-03-26に公開

国際バカロレアの DP 科目「哲学」に関する一考察

—TOK との相違に注目して—

次橋 秀樹

はじめに

本稿では、国際バカロレアの後期中等教育課程にあたるディプロマプログラム（以下、国際バカロレアについては IB、ディプロマプログラムについては DP と記す）における科目「哲学」のカリキュラムと教育方法を検討する。

近年、IB は世界中で注目され、認定校も増えている。とくに日本では 2013 年以降、DP の一部の授業・試験を日本語でも行なえるようにする「日本語 DP」の開発・導入や、一部科目を DP 科目の履修をもって学習指導要領で定めた科目履修に代える特例措置などの政策的な後押しが積極的に行われていることもあって、長くインターナショナル・スクール中心であった認定校が、公立学校を含めた一条校にも拡大しつつある。

しかしながら、日本での IB 認知は近年急速に広がったものであり、一般的には誤解されていることも多い。例えば、フランス語の「バカロレア」を冠したその名称から、IB はフランスのバカロレア試験としばしば混同されることがある。また、IB 研究もまだ途に就いたばかりである。IB については福田誠治、岩崎久美子、大迫弘和などによって研究書や概説書が近年相次いで出版されている¹が、海外の指導用テキスト翻訳や研究上の関心は DP の象徴的な独自コースである Theory of Knowledge (TOK : 知の理論) に偏りが見られる。

これらの誤解と偏りは、図らずも IB と「哲学」との間に、ある種の不明瞭な関わりを生じさせる要因となっている。このことは、フランスにおけるバカロレア試験では、初日に全員必須の科目「哲学」の試験が設定され重視されていることがよく知られていること、TOK で求められる高次の論理的・批判的思考は「哲学的」とであると捉えられがちであることと無縁ではな

ろう。しかし、IB とフランスのバカロレア試験はまったく別のものであり、TOK が「哲学的」であることについては確かに IB を運営する国際バカロレア機構（以下、IBO と記す）も公式文書で認めているものの、同時に「哲学」との違いも明らかに打ち出しているという事実がある。

このような中、DP には独立した科目としての「哲学」が存在する。しかし、いまだ日本語での実施は認められていないこの科目「哲学」の内実まで踏み込んで行った研究は管見の限りない。本稿において、フランスのバカロレア試験や TOK とも比較しながら、IB の科目「哲学」のプログラム全体における位置づけ、ねらい、教育方法、評価方法を明らかにすることは、IB 理解の一助となるだろう。また、ここから日本の高校における公民科教育、とくに「哲学」と類似する内容を扱う科目「倫理」への示唆も得たい。

なお、本稿では IBO が作成している 2014 年発行の最新版の『哲学 教師用指導の手引き (Philosophy guide)』(以下、『指導の手引き』と記す) に加え、いずれも生徒用テキストとして広く用いられているとされるケンブリッジ大学出版の『IBDP のための知の理論 (Theory of Knowledge for the IB Diploma)』、オックスフォード大学出版の『哲学：人間であること (Philosophy : Being Human)』を主要な分析対象としている。

1. 科目「哲学」と TOK の位置づけと概要

(1) DP プログラム全体のなかでの位置付け

DP は、言語と文学（母国語）、言語習得（外国語）、個人と社会（人文・社会科学系科の科目群）、理科、数学、芸術の 6 グループのなかから 1 科目ずつ選択し、うち 3～4 科目を上級レベル科目（HL）として各 240

表 1 国際バカロレア ディプロマプログラム (2019 年 3 月 1 日現在。IBO ホームページを元に筆者作成)

No	グループ名	科目例	学習時間(時間)		SL		HL		満点
			SL (標準レベル)	HL (上級レベル)	外部 評価 割合	内部 評価 割合	外部 評価 割合	内部 評価 割合	
1	言語と文学	言語A: 文学	150	240	70	30	70	30	7
		言語A: 言語と文学	150	240	70	30	70	30	7
		文学とパフォーマンス	150	なし	60	40			7
2	言語習得	言語B	150	240	75	25	75	25	7
		初級語学	150	なし	75	25			7
		古典言語	150	240	80	20	80	20	7
3	個人と社会	ビジネスマネジメント	150	240	75	25	75	25	7
		経済	150	240	80	20	80	20	7
		地理	150	240	75	25	80	20	7
		グローバル政治	150	240	75	25	80	20	7
		歴史	150	240	75	25	80	20	7
		情報テクノロジーとグローバル社会	150	240	70	30	80	20	7
		哲学	150	240	75	25	80	20	7
		心理学	150	240	75	25	80	20	7
		社会・文化人類学	150	240	80	20	75	25	7
	世界の宗教	150	なし	75	25			7	
4	理科	生物	150	240	80	20	80	20	7
		化学	150	240	80	20	80	20	7
		コンピュータ科学	150	240	70	30	80	20	7
		デザインテクノロジー	150	240	60	40	60	40	7
		物理	150	240	80	20	80	20	7
		スポーツと運動と健康科学	150	240	80	20	80	20	7
		環境システムと社会(グループ3としても可)	150	なし	75	25			7
5	数学	数学スタディーズ	150	なし	80	20			7
		数学	150	240	80	20	80	20	7
		数学さらにハイレベル	なし	240			100		7
6	芸術	ダンス	150	240	60	40	60	40	7
		音楽	150	240	50	50	50	50	7
		フィルム	150	240	60	40	40	60	7
		演劇	150	240	65	35	75	25	7
		美術	150	240	60	40	60	40	7
		必須三要件	学習時間		レベル設定なし。TOK とEEの評価マトリクス 表に基づき、合計で3 点満点。	外部 評価 割合	内部 評価 割合	満点	
コア	TOK	100		67		33	3		
	EE	40		100		0			
	CAS	150		得点化しない					

斜体は日本語で学ぶことが可能な科目

時間、2～3科目を標準レベル科目(SL)として150時間学ぶ(表1)。大学での専攻を意識した高度な学習機会も与えつつ、科目を絞り込みすぎないように深さと広さのバランスを取ることを意識した選択科目となっている。ここで学習する6つの科目は、すべて資格のための評価対象となり得点化される。これに加えて、必修要件(コア)としてTOKのほか、課題論文(EE: Extended Essay)、創造性・活動・奉仕(CAS: Creativity/Action/Service)に取り組むことが求めら

れる。プログラム上では、TOKがDPの中で必修要件であるのに対し、科目「哲学」は、グループ3で選択できる科目の一つという位置づけである。

(2)IBのディプロマ認定方法

IBの評価は、まずIBOが行う世界共通試験を中心とした外部評価と、学校が行うレポートやプレゼンなどの内部評価を組み合わせで各科目で行われる。国際的な大学入学資格として通用するディプロマ資格は、

原則的にその総合点（スコア）が 45 点満点中、24 点以上で得られる。取得率は例年 80%程度である。この総合点や各科目のレベル・得点に応じて、選抜性の高い大学への門戸も開かれる。近年は、IB の教育内容が高く評価されていることもあって、DP 資格取得に至らなくても各教科の得点だけを評価して入学を許可したり、入学後の単位として認定したりする大学もある。

芸術グループ以外の選択科目では、IBO が行う世界共通試験（最終試験）が行われるが、表 1 が示すように全体に占める評価割合は 7～8 割程度であり、2～3 割は所属する学校においてレポートやプレゼンを担当教師自身が IB 基準に基づいて内部評価する（内部評価は IBO によってモデレーションも行われる）。

総合点に占める割合だけを見れば、科目「哲学」が 7 点満点に対して、TOK と EE は足して 3 点にすぎない。しかし、TOK と EE は必修であるとともに最低評価を受けた場合は総合点がいくら高くても資格が得られないとも決められており、点数には見えにくい重要な位置づけが与えられているとも言える。

(3) フランスのバカロレア試験との相違

この IBDP と同じ大学進学者を主たる対象とするフランスの普通バカロレア試験が大きく異なる点として、制度的には次の三点を指摘できる。まず、IB のディプロマ資格はフランスのように試験の成否だけによって得られる²ものではなく、共通の外部試験と、規定の教育内容・教育方法・授業時数などの枠組みに沿ったカリキュラムでの学びに対する各学校での内部評価を総合して得られるものである点。次に、同一教科で上級・標準のレベル分けが行われている点。そしてフランスのように配点指数を掛けて軽重をつけたりせず全科目が 7 点満点で DP 資格取得のために同等に扱われる点である。

2. 科目「哲学」では何をどう学ぶか

(1) ねらい

本節では、TOK と比較しながら科目「哲学」のカリキュラムや教育方法を検討したい。まず、両者のねらいについて、現在の『指導の手引き』では、表 2 のように説明される。

表 2 「哲学」のねらい³

- | |
|--|
| <p>HL と SL の哲学コースのねらいは、生徒たちが以下のことができるよう、哲学的な活動に関わらせることである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 探究的で知的好奇心のあるものの考え方を発達させる 2. 根拠と目的をもつ筋道の立った議論をする 3. 自分自身の経験とイデオロギー的で文化的な見方を批判的に検討する 4. 哲学的な考えの中にある多様なアプローチがわかる。 5. 自分を取り巻く世界に哲学的な知識やスキルを適用する。 |
|--|

一方、TOK は、具体的で新たな知識を与えることではなく、あらためて知識とは何かを問いなおすこと、つまり知るプロセスを探究するコースである。TOK のねらいは表 3 のように示されている。

表 3 TOK のねらい⁴

- | |
|---|
| <p style="text-align: right;">クリティカル</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 知識の構築に対する批判的なアプローチと、教科学習、広い世界との間のつながりを見つける。 2. 個人やコミュニティがどのようにして知識を構築するのか、その知識がどのように批判的に吟味されるのかについて、認識を発達させる。 3. 文化的なものの見方の多様性や豊かさに対して関心を抱き、個人的な前提や、イデオロギーの底流にある前提について自覚的になる。 4. 自分の信念や前提を批判的に振り返り、より思慮深く、責任意識と目的意識に満ちた人生を送れるようにする。 5. 知識には責任が伴い、知ることによって社会への参加と行動の義務が生じることを理解する。 |
|---|

科目「哲学」に焦点を合わせれば、表 2 の項目 4、5 に独自性が強いが、批判的な思考など TOK と重なる部分もある。

もともと TOK は哲学とまったく別のところから生みだされたものではなく、哲学もベースになって生まれたものである。TOK は、IB 創設当初、フランスの哲学視学官のドレフュスやジュネーブのインターナショナル・スクールの哲学教員で海外のフランス人学校で教えた経験も持つルノーらが具体的に形作ったとされている⁵。

日本における IB 研究書の原初とも言える西村俊一編著『国際的学力の探究——国際バカロレアの理念と課題』（1989 年）において、宮腰英一は、『知識の理論 [現在では知の理論と訳される]』の特徴として、当初、哲学的内容への過度の傾斜や各科目の断片の寄せ集めの性格が目についたが、次第にそのような問題点の修正・改善の努力がなされてきている」と論じている。具体的には、当初 TOK の教育内容の承認と生徒の成績の調整は科目「哲学」担当の主任試験官ないしその代理人が行っていたが、1987 年から実施される新規定

ではこの箇所が削除され、科目「哲学」への傾斜を避けるように努めていること、1985年版のTOKの『指導の手引き』（第5版）では、TOKの性格と科目「哲学」との区分を明確にしたとされている⁶。TOKの「本質（Nature of the Subject）」として説明されている表4の記述がこれにあたる。

表4 TOKと「哲学」の相違(1985年)⁷

このコースは、すべてのディプロマ希望者に義務づけられる。なぜなら、それはIBの教育哲学のキー要素となるものだからである。その目的は、教室の内外において、生徒たちの知識や経験に関する批判的省察を刺激することにある。したがって、このコースは、生徒たち自身や他の人たちが、すべての人間が行う価値判断と同じように、概念や議論の分析を通して何を知っているか批判的な気づきを獲得することを励ますという意味で「哲学的（philosophical）」である。ゆえに、その目的（とパフォーマンス基準の一つ）は、グループ3で述べたIBのオプション科目にある科目「哲学」と同じである。TOKと科目「哲学」の主な違いは、TOKが「すべての人にとっての哲学」であるのに対し、哲学はその科目における専門家の興味関心を満たすものである。

このコースのタイトルと哲学の分野の言語的な類似性にも関わらず、また、特定の認識論の問題は知識や経験を省察するもの全てが直面するが、IBのTOKは認識論における厳格なコースを意味するものではない。これら哲学からのテキストの賢明な選択はテーマの学習をより明らかにすることを助けるだろうけれども、さまざまな「イズム（isms）」（経験主義や合理主義のような）や偉大な思想家たちについての批評を意味するものでもない。異なった学問に対して適切な考え方の検討をコースが求めているが、そのような方法論の学習自体を意図するものではない。その時々問題は適切な時期に議論されることが望ましい。しかし、多方面のトピックについて即興的な討論を続けることにコースを変えてしまうという過ちを犯すこともまたありえる。〔以下略・下線は筆者による〕

表4では「すべての人にとっての哲学」であるかどうかTOKと科目「哲学」の違いとされているが、現在ではより明瞭な説明がされている。科目「哲学」の『指導の手引き』では次のような説明が見られる。

表5 TOKと「哲学」の相違(2014年)⁸

TOKのコースは知識の性質と、私たちが知っていることと主張するものを私たちがどのように知るかについての省察を生徒たちに行わせるものである。〔中略〕

「哲学」は人間の性質と、人間であることの意味を探究し、省察させるものである。〔中略〕

TOKのコースで重点が置かれるべきは、TOKの概念を、履修しているDP科目や現実世界といった生徒たちの実生活に適用することである。〔下線部は筆者による〕

これらを問いの形式に置き換えれば、科目「哲学」は「人間とは何か」、TOKは「知識とは何か」の探究である。ではどのように「人間の性質」や「知識の性質」が探究され、評価するよう導くかを見よう。

(2)カリキュラム

①科目「哲学」のカリキュラム

科目「哲学」では全員が学ぶべきコア・テーマとされるのが「人間であること（Being Human）」である（50時間）。ここでは、「人間の性質」「自由」「自己と他者」「精神と身体」「アイデンティティ」「個性」という6つの重要概念（キー・コンセプト）を用いて考察する。コア・テーマについて公刊されているテキストでは表6のような展開を見ることができる。

表6 DP科目「哲学」テキスト目次⁹

1. イントロダクション
2. 人間の本質
人間とは理性的な存在（rational being）である/人間は非理性的な存在である/人間は白紙である
3. 個性（personhood）
自意識/行為主体性（agency）/道徳と道徳的責任/責任と本来性（authenticity）
4. 精神と身体
精神と身体という概念/精神－身体という問題/他者の精神の問題/意識
5. 自己と他者
自己と非自己/唯我論と間主観性/信頼性
6. 自由
自由と決定論/世相/存在の不安
7. アイデンティティ
パーソナル・アイデンティティ/時を超えたアイデンティティ/社会的、文化的アイデンティティ
8. IB哲学の評価

科目「哲学」では、コア・テーマに加えて、オプション・テーマとして「美学」「認識論」「倫理学」「哲学と現代社会」「宗教の哲学」「科学の哲学」「政治の哲学」の中からSLは1つ（40時間）、HLは2つ（80時間）を学ぶ。

表7 指定哲学図書(2014年版『指導の手引き』より)

著者	タイトル
ボーヴォワール	『第二の性』Vol.1 part1, Vol.2 part1 and Vol.2 part 4
デカルト	『省察』
ヒューム	『自然宗教に関する対話』
ミル	『自由論』
ニーチェ	『道徳の系譜』
ヌスバウム	『潜在能力をつくる：人間開発へのアプローチ』
ガセット	『哲学の起源』
プラトン	『国家』6巻～9巻
シンガー	『あなたが救える命』
テイラー	『「ほんもの」[authenticity]という倫理』
老子	『道徳経』
荘子	『荘子 内篇』

さらに、いわゆる哲学書も読み、その理解を求める内容もある。SL・HLともに「哲学のIB指定図書リスト」の中から一つを学ぶことも求められる(40時間)。2016年版の最新のリスト(表7)には古代から現在、東洋・西洋を含めた12人の著作が名を連ねている。なおこのリストは7年ごとに行われる『教師用手引き』改訂のたびに更新される。2009年版からは著者で5人、著作で1つとその半数が入れ替わっている。

②具体的な展開 「哲学する」

では科目「哲学」の授業展開はどのようなものが想定されているだろうか。教育方法(Approach to the teaching and learning of philosophy)として『指導の手引き』示されているのは、次の5つである。

- ・思考スキル
- ・「哲学する(Doing philosophy)」こと
- ・哲学的なテキストに関わらせること
- ・多様な見方に関わらせること
- ・鋭く論争的なトピックに関わらせること

なかでも、「哲学する」ということ、すなわち哲学的なアクティビティに積極的に関与させることはとくに強調されている。『指導の手引き』ではソクラテス・メソッドの原型をつくったとされるレオナルト・ネルソンの「ソクラテスは哲学を教えたのではない。彼は哲学すること(philosophize)を教えたのである」という言葉を引きつつ、次のように説明する。

「ドイツの哲学者、レオナルト・ネルソンは、効果的な哲学教育は『哲学を教えることではなく、哲学を教えるアートであること。哲学者について教えることではなく、生徒たちが哲学者になるようにするアートであること』であると述べ、生徒たちが哲学に活動を通して関わることの重要性を強調した。哲学コースのそれぞれの領域は生徒たちに異なる哲学的概念や課題を探究する機会を与え、ただ一つ『哲学する』という基礎となる焦点を持つことは、これら異なる要素を越えてコースの統合や一貫性を与えることを助ける。」

では具体的にどう「哲学する」契機が組み込まれているのだろうか。テキストの第5章「自己と他者」を見てみよう。冒頭に『指導の手引き』でも示されている「学習テーマのアイデア」として「自己と非自己」「唯我論と間主観性」「確実性(authenticity)」が

並べられ、続けて「討論する問い(discussion questions [テキストでは「いくつかの本質的な問い(some essential questions)と表現されている])」として、「自己のようなものは存在するのか?」「自分自身を知ることは可能なのか?」「私たちはどのように『自己』を定義する方法の『それ以外の』部分を定義するのだろうか?」が示されるところから始まる。そして、以下、表8のように続く。

表8 テキスト第5章「自己と他者」の項目¹⁰

なぜ自己について考えることが重要なのか?
自己とは何か?
自己という概念の概観
自己についての問いをひもとく
哲学的分析と評価の過程を理解する/分析や評価とは何か?/異なるメソッドロジーの役割/概念的枠組みを構築する/とりうる分析的枠組み/自己を探究する
本質主義の自己概念を理解する
本質主義者の伝統の中での議論
古代における位置:プラトン/アリストテレス/アウグスティヌス
「プシュケー」あるいは魂としての自己/状況の理解/魂の三分説/古代の批評:マンティネイアのディオティマ/現代の批評:プラトンの自己の見方についてのフェミニストの批評/アリストテレスと身体/アウグスティヌスのキリスト教徒の自己
現代における本質的な自己
現代の議論/現代の自己と/自己認識から自己意識への変化/プラトンからデカルトへ/デカルトと理性的な自己/デカルトの提案とは何か?/デカルトは何を論じたか?
まとめ:デカルトから何をを得るか
デカルトに代わるもの
ホッブズと物質主義的な自己/ルソーと道徳的な自己/ヘーゲルと社会的な自己
ロックと自己についての非物質的/非実体的な心理学的理論/ロックは何を論じたか?/自己と実体の変化/ロックの議論を評価する/ロックの議論における仮定
本質的な自己の拒絶
ヒュームと自己のバンドル理論
ヒュームの自己についての概念の理解/ヒュームの議論を評価する
無我(no-self)についての現代理論
パーフィット/ストローソン
カントと超越論的エゴ
東洋における自己の考え方についての理解
インド
インドの自己の考え/コントローラーとしての自己
仏教と無我
ダイナミックな相互作用としての自己/自己を捨てる/類似点/相違点
中国
儒教:利己的行動の可能性としての自己/孔子の自己
本質的な自己の拒絶
本質的な自己のイントロダクション
分析的でヨーロッパ的な伝統

実存主義の自己の出发点
自己へのアプローチとしての現象学
キルケゴールとニーチェへのイントロダクション
キルケゴール/本来性と内省の問題/キルケゴールと自己/
ニーチェの理解/実存主義の影響
サルトルと自我の概念
デカルト以後の自己の探究/自己（私たちが知るものとは異なる）/枠組み/カントの理解/サルトルの意識/他者ととも
にいること
カミュ
ボーヴォワール
メルロ・ポンティ：主体性を形作る自己
唯我論への応答：間主観性
文化の役割：他者あるいはコミュニティの役割
ポストモダンの自己概念
ポストモダンの自己
結び
引用文献

内容の配列としては、本質としての自己（本質主義）、存在の結果としての自己（実存主義）、幻想のラベルとしての自己（誤概念）という異なる立場を、古代・古代ローマを中心としたキリスト教期・18世紀の啓蒙運動期・近代・ポストモダンという時系列を追いながら、さまざまな哲学者の考えとともに押さえていく展開を取っている。

テキストには問いかけや資料の読み取りなど、多様な「哲学すること」を促す活動（activity）が多く取り入れられている。例えば、質問（question）・練習（exercise）・読み取り問題（reading activity）・分析問題（analysis activity）・映像視聴問題（viewing activity）・復習問題（revision activity）・ふりかえり（reflection activity）・評価（assessment activity）さらに深めるために（find out more）などである。この活動の具体例を挙げたい。本章の導入部分は、多様に姿を変えている「川」の様子を人に例えた短い文章（stimulus）を読んで、次のような問いに答えることから始まる。

表 9 テキスト第 5 章 導入の問い¹¹

<p>上の刺激（stimulus）では、筆者は自分自身について語るために川の類推を用いている。</p> <p>1. 自己に関するどんな問題がこの文章から特定できるだろうか？ 例えば、川は、どれほど変化してもいつも同じ川であるのか？ もし、変わってしまったとしたら、何が同じものとして残るのか？</p> <p>2. 現実世界からの例と川の多様な様子を結びつけよ。</p> <p>3. あなたの現在の理解や信念に基づけば、もしあなたが次の意見からどれかを選ぶならば、どの一般的な立場が自己についてのあなたの考えにより近そうか？</p> <p>・あなたの中に固定された存在があり、生まれる前に決ま</p>

っている。

- ・ただ基本的な枠組みは生まれる前に決まっているが、変化する存在。
 - ・自分が決めたとき固定することのできる存在。
 - ・成長に応じ影響を受けて決められる固定された存在。
 - ・自分の人生において他者によって決定される変化する存在。
 - ・自己と呼ばれるものなど存在しない。
- 本章を終えた後、これらの意見に戻りなさい。考え方は変わりましたか？ もし自分の意見を変えたのなら、何が最も大きな要因としてあなたに影響を与えましたか？ もし変わらないなら、元々の意見をより確かなものにしたもっとも重要な要因は何ですか？

生徒たちは表 9 の 3 の問いによって自らの立ち位置が問われる。そして、いずれの立ち位置を取っても、また「なんとなく」選んだ場合でも強くそう思った場合でも、章の中にはその考えが哲学者によって補強されたり批判されたりする機会が組み込まれている。章を終えて改めて省察するまでもなく、その都度、自らを問い直すこと、「哲学すること」は避けられないようになっていっていると言えよう。

このほか、他教科のテキスト同様に、TOK との関連（TOK Links）として、問いや説明が挿入されている。本章では 7 か所挿入されており、TOK との類似性・差異を往還しつつ確認する機会が意識的に配置されていることが分かる。

③TOK のカリキュラム

「知識の性質」を追究していく TOK では次のような探究アプローチが用いられる。まず、知識には一人の個人が生成した「個人的な知識」と複数の人間が生成する「共有された知識」があると分類される。それぞれの意味と関係、バランスを考えることで、学習者としての個人と知識の関係性を問う。そして、言語・知覚・感情・理論・想像・信仰・直感・記憶という 8 つの「知るための方法（ways of knowing）」が示され、これらが「数学」・「自然科学」・「ヒューマンサイエンス」・「芸術」・「歴史」・「倫理」・「宗教的知識の体系」・「土地固有の知識の体系」という 8 つの異なる「知識の領域」の文脈、個人との関係性においてどのように機能し、相互作用するか探究される¹²。

「知の領域」で挙げられている領域が DP の各グループ（表 1）における選択科目とも重なっているように、TOK ではあらためて各教科の学びを知識をキーにして独自の視点でゆさぶり、問い直すのである。このブ

ロセスにおいて、教科との往還がはかられ、教科同士のつながりが見出される。ゆえに TOK は、全教科の学びに関わるコアとしての重要な位置づけを与えられている。最後に、科目「哲学」と TOK それぞれの具体的な評価方法に注目し、相違をより明確にしたい。

(3)評価

表 1 でも比率を示した TOK と科目「哲学」（ここでは SL）の内部評価と外部評価の具体的な方法は表 12 の通りである。いずれもパフォーマンス課題による評価と言える。

表 10 TOK と教科「哲学」の評価方法¹³

	TOK	哲学 (SL)
内部評価	<p>プレゼンテーション (配点：33%) 実社会の用語で説明される実社会の状況を使って、「知識に関する問い」を特定し、その問いを TOK の語彙で探究し、結論を導いた後、最後に実社会の用語に置き換え直す。1 人につき 10 分間、最大 3 人のグループワーク可</p>	<p>レポート (配点：25%) 哲学的でない刺激（小説・演劇・詩、歌詞、万場・絵画・写真またはその他視覚できるイメージ、映画・テレビやラジオ番組、広告、新聞記事・投書、パンフレット）を哲学的に分析する。2000 ワード以内、グループワーク不可。</p>
外部評価	<p>所定課題エッセイ (配点：67%) 一般的な TOK の語彙で表現される所定課題について、関係する「知識に関する問い」を特定し、その問いを例証するための実社会の具体的事例を見つけ、TOK の枠組みを用いて探究する。最後に一般的な結論を導き、TOK の語彙を用いて述べる。</p>	<p>世界共通試験 試験問題 1 105 分 (配点：50%) コア・テーマとオプショナル・テーマの各セクションにおいて 1 問選択 試験問題 2 60 分 (配点：25%) 指定テキストに関連する問題 1 題（2 問）を選択 各問題は Part A（テキストのキーとなる概念、考え、議論について説明する）、Part B（テキストを批判的に論じる）から成る。</p>

以下、配点の多い外部評価に注目して問題を見よう。

表 11 「TOK」所定課題エッセイ 課題文見本¹⁴

<p>[6 つの所定課題から 1 つを選択。課題は提出の半年以上前に発表。1600 ワード以内。]</p> <p>1. 「誰か一人が私たち全員よりも賢くなることはない」(エリック・シュミット)。この主張にどの程度同意するかを、「個人的な知識」と「共有された知識」に言及しながら論じなさい。</p> <p>2. 「地図は、事物を単純化してこそ有用なものとなる」。この考え方は、知識に対してどの程度あてはまりますか。</p>
--

3. 「知識の領域」は、過去に行われたことによってどの程度形づくられていますか。2 つの「知識の領域」に言及しながら検討しなさい。
4. 「すべての知識は、パターンと変則を認識することに依存している」。この主張にどの程度同意するかを、2 つの「知識の領域」に言及しながら検討しなさい。
5. 「知識をもつことにより、特権が与えられる」。この主張はどの程度正確ですか。
6. さまざまな「知るための方法」は、誤った思い込みをどの程度防止しますか。少なくとも 1 つの「知識の領域」に言及しながら、自身の解答の正当性を論証しなさい。

当然ながらすべて「知識」に関連したこれら TOK の問いは、一見既存知識がなくてもなんとか答えられそうでもあるが、「個人的な知識」「共有された知識」「知識の領域」「知るための方法」といった知識を問う直すための枠組みを理解し、実社会・他の学修科目のなかで応用できているかが評価基準にも含まれており、TOK の思考方法、いわば作法に則らなければ評価されないようになっている。

一方、科目「哲学」には他のほとんどの科目同様に最終試験がある。世界共通のこの試験では、コア・テーマ、オプショナル・テーマ、指定図書順に、指定された学習内容に応じたかたちで、次のような問題が出題されている。

表 12 科目「哲学」の試験問題例(2010 年 5 月実施)

<p>試験問題 1 105 分 セクション A コア・テーマ：人間とは何か？ [2 問中 1 問を選択 以下、1 問を抜粋] 次の一節を読み、以下の問いに答えよ。 「他者との関係という点を除いて、私は私ではないと彼は言う。もし、いかなる他者も存在しないならば、私というものが存在しない。なぜなら、私とは何かという問いは、他者との関係においてのみ意味をもつものだからだ。」[出典・略] (800 ワード程度で) あなたの解答を書きなさい。 ・この一節が強調する「人間とは何か？」という問いの中心にある哲学的な基本概念あるいは哲学的な問題を特定せよ。 ・あなたが特定した哲学的な基本概念あるいは哲学的な問題に対して、異なる 2 つの哲学的アプローチを用いて検討せよ。 ・あなたが特定した哲学的な基本概念あるいは哲学的な問題を説明し、評価せよ。</p> <p>セクション B オプショナル・テーマ [8 テーマ 16 問中 1 問を選択 以下、1 問を抜粋] オプショナル・テーマ 2：倫理学の理論と問題 5. 倫理学はあなたが何をするかよりもあなたが誰であるかということにより関心を持つべきだ、という視点を批判的に評価せよ。</p> <p>試験問題 2 60 分 指定図書 [12 テーマ 24 問中 1 問を選択 以下、1 問を抜粋]</p>
--

21. シモーズ・ド・ボーヴォワール『あいまいさの論理』
実存主義はそれ自体をあいまいさの哲学と定義する、という
ボーヴォワールの考えについて説明し、論じなさい。

科目「哲学」のテストにおいても、とくにコア・テーマでは「哲学」の枠組みを用いて論述することが指定されていることが分かる。

なお、これら进行评估するために、外部評価・内部評価ともにルーブリック（『指導用の手引き』では「マークバンド」とされる）も公表されている。

おわりに

ここまで見てきた科目「哲学」を、日本の高校での実践の文脈に照らしつつ再検討して本稿を終えたい。

IBDP において科目「哲学」は、フランスのように必修ではない。ただし、いったん同じグループの科目「歴史」や「地理」ではなく「哲学」を選択すれば、これだけに集中して 150 時間（SL）または 240 時間（HL）をかけることができる。対して DP 相当の年齢にあたる日本の高等学校での科目「倫理」は、他の地歴・公民科目も学びつつ 70 単位時間という制約のなかで授業が行われる。IB は広さと深さのバランスを取ったプログラムとされるが、ディプロマ資格取得のために選択すべき科目数は 5～6 科目と日本の高等学校卒業のために求められる科目数よりもかなり少ない。そして、いったん選択すれば、大学教養レベルといていいほどまでかなり深く学ぶこともできる（学ぶことが求められる）ように設計されている。

また、海外のテキストは重厚であることは知られているが、IB の科目「哲学」のテキストも A4 サイズ、本文 401 ページに及んでいる。同じ「自己と他者」という名称の章を持つ日本の「倫理」教科書（『現代の倫理』山川出版社、2018 年）は A5 サイズ、本文 203 ページであることを考えれば、歴然とした差がある。上記の IB のテキストは全単元を含むものではなく、割当 50 時間相当のコア・テーマを対象としたものであることを考えると、その重厚さが際立って見える。

条件が異なるゆえに、IB の科目「哲学」と日本の「倫理」を単純に比べることにはあまり意味がない。IB には科目「哲学」と共通点ももつ TOK があり、相互に補強しながら学ぶという工夫もある。しかし、IB では分量よりもそれを背景として、活動を重視した「哲学

する」ための工夫が散りばめられており、最終的にパフォーマンス課題によって評価されていることには注目したい。IB に対し、日本の教科書はあまりにも問いが少ないと言える。そのうえ、大学入試で「倫理」と言えば、ほとんどが多肢選択式の問題の大学入試センター試験での利用であり、専ら哲学に関する知識の再生が求められることに教員も生徒も慣れている。

一方で、2018 年版改訂の高等学校学習指導要領（公民）では「哲学に関わる対話的な手法などを取り入れた活動を通して、生徒自らが、より深く思索するための概念や理論を理解できるように」とある。今まず IB に学べることがあるとすれば、科目「哲学」全体における本質的な問い、各章における本質的な問い、そして各項目に散りばめられている問いも含めた活動、さらには最終試験における問いの具体や設定・評価のあり方であろう。

注

- ¹ 福田誠治『国際バカロレアとこれからの大学入試 知を創造するアクティブ・ラーニング』亜紀書房、2015 年。岩崎久美子編著『国際バカロレアの挑戦 グローバル時代の世界標準プログラム』明石書店、2018 年。岩崎久美子・大迫弘和編著『国際バカロレアの現在』ジヤース教育新社、2017 年など。
- ² ただし、フランスでは 2021 年実施のバカロレア試験から高校での成績も採用するなどの変更が予定されている。
- ³ 国際バカロレア機構（IBO）、*Philosophy Guide First Assessment 2016*（『哲学 指導の手引き 2016 年第 1 回試験』）。以下、『哲学 指導の手引き』とする）、2014 年、p.10。
- ⁴ IBO『知の理論（TOK）指導の手引き 2015 年第 1 回試験』（以下、『TOK 指導の手引き』とする）2014 年、p.16。
- ⁵ A. D. C. Peterson, *Schools Across Frontiers: The story of the International Baccalaureate and the United World College*, Illinois, Open Court, 1987, p.46.
- ⁶ 西村俊一編著『国際的学力の探究—国際バカロレアの理念と課題—』創友社、1989 年、pp.79-87。
- ⁷ A. D. C. Peterson, *op.cit.*, pp.221-224.
- ⁸ 『哲学 指導の手引き』p.8。
- ⁹ Nancy Le Nezet, Guy Williams, Chris White, Daniel Lee, *Philosophy: Being Human*, Oxford University Press, 2014, p.vii.
- ¹⁰ *Ibid.*, pp.179-262.
- ¹¹ *Ibid.*, pp.179-180.
- ¹² 『TOK 指導の手引き』、pp.9-10。
- ¹³ 『TOK 指導の手引き』（pp.61-76）および『哲学 指導の手引き』（pp.35-53）をもとに筆者作成。
- ¹⁴ IBO『知の理論（TOK）所定課題 課題文見本』2015 年。

（博士後期課程）

受理 2019 年 3 月 12 日